

中国の文化と日本の文化の比較

——中国語と日本語の表現の相違を中心に——

崔 春 基

目 次

- I. はじめに
- II. 中国語の立体性と日本語の線条性
- III. 中国語の具体性と日本語の抽象性
- IV. 言語現象から見た中・日の文化の相違点
- V. おわりに

I. はじめに

考古学の最新研究から日本の弥生時代の始まりが、定説より500年も遡るようになったことについては、異議を唱える人はあまりないようであるが、北米大陸に現代人が5万年も前に渡ったという説には、異議を唱える人が前者より多いようである。両者は共に、定説を覆すような研究結果であるが、それに対する反響は違う。前者の場合は厳密な炭素測定をして得た結果であるから反響がよく、後者の場合は5万年も前に北米大陸に渡った現代人が使ったという石器の測定に問題があったから、そんな反響になってしまったという見方をすることもできるだろう。

ところが、5万年も前に北米大陸に渡ったというその現代人、つまり、われわれの先祖であるホモ・サピエンスと同時代にいたというネアンデルタール人は絶滅したが、その絶滅の原因の最新の研究結果については、それほど異議はないようである。もちろん最新の研究結果が出るまでは議論も多く、いろいろ

な主張があったようである。

無論、最新研究結果で議論が完全に収まるとは限らない。しかし、最新の研究結果は、それほど容易に覆すことのできるようなものではないようである。というのは今度の研究結果という物は、他でもない人間の考え方や心遣いを表現し、人間の過去の経験や知識などを次世代に伝えて、未来への備えを可能にする事ができる「言語」であるからである。

このような、言語という物は、ネアンデルタール人を絶滅させ、われわれの祖先であるホモ・サピエンスを繁栄に向かわせた人類の存亡を左右するほどの大事なものである。

本論文ではこのような言語の中の中国語と日本語を研究の対象として、この二種類の言語の構造や意味の本質の相違点を考察し、更に、この二種類の言語の表現様式の相違点には、漢民族と日本人の違った心の動きが含まれて、最終的には中国人と日本人の文化の相違点に、つながる事を考察・研究する。研究の方法としては主として、多くの実例を実証的に分析し、探究する方法を取る。

本論文では言語を単なるコミュニケーションの道具や手段とは見ないで、人間の考え方、心遣い、価値観などを反映し、民族の文化構成の主要な要素となる物であると見るのが特徴的である。

キーワード：日本の文化、中国の文化、抽象的な言語表現、具体的な言語表現

II . 中国語の立体性と日本語の線条性

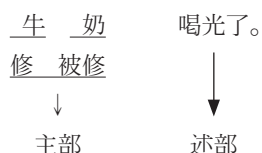
ここではまず語構成や文構成の角度から、中国語の立体性と日本語の線条性を見てみることにする。

中国語は、文構成の法則と語構成の法則が基本的に同じである。したがって、中国語の文は、日本語の文より立体的であるということができる。それは、

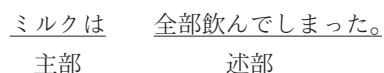
- ① 牛奶喝光了。
- ② ミルクは全部飲んでしまった。

この二つの文を比較してみても分かる。

①の場合は



のように、主部が「牛」という連体修飾語と、「奶」という被修飾語からなる立体的な文であるのに対して、②の場合は



のように、主部の部分が層をなさずに線的である。というのは、主部を「ミルク」と「は」に分けることはできるが、「は」は「奶」のような独立した意味を持たずに、助詞という単なる文法的な役割しかもたないため、意味的に独立した二要素と見ることはできないからである。

勿論、②の場合も、主部を「牛乳」と直せば、「牛」が「連体修飾語」、「乳」が「被修飾語」となって、主部が立体的になるが、そうすると、主語は「漢語」というものになってしまう、中国語に近いものになってしまう。しか

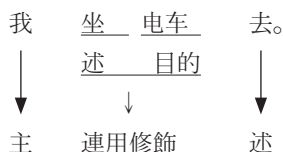
し、日本語の日常の生活用語の中には、和語や外来語が多いので、中国語の文全体（無限の文）と日本語の文全体（無限の文）を考えた場合、中国語の文に立体的な文が多いことは自ずと明白である。

文構成要素である連用修飾語というものも、中国語の場合は、日本語の場合より立体的である。

例えば、次の③と④の二つの文を比較してみると

- ③ 我坐电车去。
- ④ 私は電車で行く。

③の方は



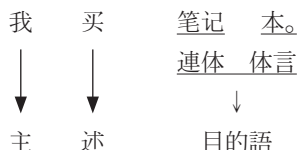
のように、「去」という用言を修飾する成分と見ることができる「坐电车」は、「坐」という「述語」と「电车」という「目的語」からなって立体的であることが明確である。これに対して、日本語の④の連用修飾語である「電車で」は、「層」を成さないで、ただの「電車で」という「線的」なものであることがよく分かる。

このように、中国語は、主語であろうと、連用修飾語であろうと、日本語より立体的なものが多いのが特徴的である。そればかりか、中国語の文は、目的語や、述語なども同じく、日本語の文より立体的なものが多い。例えば、

- ⑤ 我买笔记本。
- ⑥ 私はノートを買う。

の⑤は、中国語の典型的な文で、文を成す文

節の順序が日本語とはまったく違う。中国語と日本語の違いを取り上げる場合、この違いを無視する事は決してできない最も典型的な違いであるが、このような典型的な文の構成要素である目的語、ここでは具体的には「笔记本」というものであるが、この「笔记本」が日本語と違って、立体的である。



この図は、中国語は目的語も立体的であることを表した図であるが、これに対して、日本語は

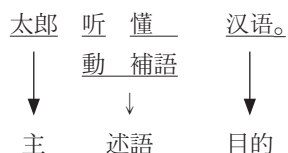
私は ノートを 買う。

のように、ただの線条に過ぎない。

さて、中国語は、述語も日本語の場合と違って立体的な場合が多い事を見てもみることにする。

- ⑦ 太郎听懂汉语。
- ⑧ 太郎は中国語が分かる。

この⑦の述語を図示すると次のようである。

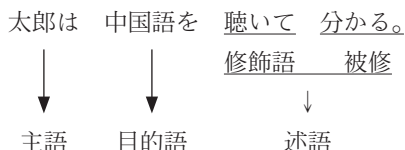


このように⑦の述語は立体的であるが、⑧の方の述語「分かる」は、「助動詞」も付かないただの動詞である。

ところで、⑧の述語「分かる」を、⑦の述語「听懂」を直訳した「聞いて分かる」に直

したらどうなるだろうか。つまり、⑧を「太郎は中国語を聞いてわかる」と直したらどうなるかという問題だが、この場合の述語「聞いて分かる」は、二つの違った意味を持つ語からなる述語なので、立体的な文の成分であると見ることができる。

つまり、日本語も



のように、文の構成要素が立体的になるものが多い。前掲の図は、述語が立体的なものであることを表したものであるが、文中の他の成分も立体的に成り得る。また、述語だけの場合でも、⑧のように二つの動詞が接続助詞「て」を介して結合するものもあり、いわゆる複合動詞「飛び上がる」、「押し倒す」のようなものもあったりして、日本語の文の成分も立体的なものが多い。しかし、それでも立体的な述語を具有する文は、中国語の方が日本語より多いと思う。というのは、中国語の文の述語は、日本語には無い、いわゆる「述補関係」という不思議なものがあって、その「述補関係」の述語を構成する補語というのは種類も多く、内容も多種多様であるからである。つまり、中国語の文の述語には、日本語に無い形のものや、日本語に無い内容のものが多いが、それらが立体的な構造になるため、結局は中国語の方に立体的な文構成成分を具有する文が多くなる。

述語以外の文構成の成分においても、日本語の場合は、前述した「牛乳」のような漢語からなる成分などに立体的なものが見られるが、和語や外来語などからなる文の成分には、立体的な成分が中国語の場合よりは多く見られない。したがって、中国語の文全体と、日本語の文全体を鳥瞰的に見た場合、中国語

の文は立体的な文構成成分が多く、日本語の文には立体的な文構成成分が中国語よりは少ないといえることができるようである。

以上は文単位において、中国語は日本語より立体的であることを見てみたが、次は、中国語は、語単位においても日本語より立体的であることを考察する。

さて、もともと中国語は、一字が一語、つまり一音節が一語というのが基本であったが、白話文学出現後、だんだん多音節語が増加して、現代白話においては多音節語が主役を成すぐらいになったといっても過言ではないほどである。しかし、日本語に比べてまだまだ多音節語が少ない。日本語は和語であろうと、外来語であろうと、漢語であろうと多音節語が基本であって、一音節語は例外と見て良いものである。ここで言う語(単語)とは、中国語の場合は、文を、文節、語、語素に分けた場合の「語」を指し、日本語の場合は、文を、文節、語に分けた場合の「語」を指す。

このように決めた中国語の語(単語)は、日本語の語(単語)より一音節の語が多く、いわゆる単純語と合成語が全部包含されてしまう。したがって、中国語の語は、語素との区別もはっきりしないし、文節(短语)との区別もはっきりしない。

しかし、現代中国語には、破竹の二音節語化現象が現れ、二音節語が圧倒的に多くなって、今は二音節語の多いのが、中国語の一つの顕著な特徴となっているが、その二音節語の構造と語素間の意味関係が分かれば、中国語の立体性が容易に分かるようになると思う。

そこで、ここでは、まず、なぜ二音節語か、という事に触れてみたい。

さて、中国語の会話文においては

×今天晚上月很亮。(今夜は月が明るい)

は、非文である。その原因は「月(yue)」が一音節の語であるからである。「月亮」という二音節の語であれば文は落ち着く。

中国語の現代語においては、一音節語や多音節語をみんなが寄ってたかって二音節語化する傾向が見られる。例えば、

虎 龙井茶

のような、一音節語や三音節語などを

老虎 龙井

のように、二音節語化してしまう。さらに、「美国」、「法国」のように、外国の国の名前は、「国」という字を付けて呼ぶのが慣わしであるが、「日本」や「印度」などには「国」を付けないで呼ぶ。というのは、「日本国」や「印度国」などと呼ぶと、二音節語の発音になれた中国人には変な感じがするからである。それぐらい中国人はもう二音節語には馴染みきっている。

では、どうして中国人はそれほど二音節語に拘っているのか。

それは一言で言うと文化が日本人と違うからである。日本の文化は、語単位の場合は「等長(違った音節を同じ長さで発音する)のリズム」であり、文単位の場合は「五・七・五のリズム」であるが、中国人は、語単位の場合は「二音節のリズム(二言律)」で、文単位の場合は「五言律」か、又は「七言律」等であるからである。

さて、「二音節のリズム」が好きな中国人は、大量に二音節語を作り上げたが、その作り方の概略は次の通りである。

1. 語素の並立関係からなるもの
师生 夫妻 大小 上下 东西
2. 語素の修飾被修飾の関係から成る物
牛奶 大楼 温泉 山羊 闹钟
3. 語素の述語目的語の関係から成る物

- 出席 吃醋 留心 收兵 放心
 4. 述語と補語からなるもの
 打到 割断 推翻 放大 缩小
 5. 主述関係からなるもの
 人造 地震 自卫 年轻 眼红
 6. 接頭辞と語根、或は語根と接尾辞からなるもの
 初春 非法 字儿 桌子 学者
 7. 重ねの方法からなるもの
 爸爸 妈妈 星星 宝宝 往往

中国語の二音節語の作り方は以上のように分けることができるが、この他にも、「化学肥料」を「化肥」と言ったり、「对外贸易」を「外贸」と言ったりする、いわゆる省略語として作られる二音節語もある。

上述のようにできた中国語の二音節語は一体どれぐらいあるのだろうか。それは中国語の辞書を調べたら、大体的見当は付く。中国語の辞書は日本語の辞書と違って、どの語の語項目も前後の二部分からなるが、前の部分は日本語の辞書とまったく同じく語の意味を記入した後、その語の用例を記入する。ここまでは日本語の辞書と変わらないが、その後の第二部分は日本語の辞書には無い部分で、その語を語素として作った二音節語や三音節語、四音節語を並べて、それらの語の意味を記入する。ところが、その第二部分に並べる語の中、二音節語が絶対多数で、語項目によっては第二の部分の語は二音節語しかないものもあって、合成語の絶対多数は二音節語であると言っても度が過ぎる事はないだろう。

一方、二音節語が多いということは前の語素と二番目の語素の間には立体関係が形成される語が多いということであり、それらの多くの語が文中に参与して、文全体を立体化しやすいということにもなる。したがって、これは、中国語の文は日本語の文より立体的な文が多いということにつながる。

しかし、文中の二語間のつながりだけを見たら、日本語も

私は たまごを 食べる。

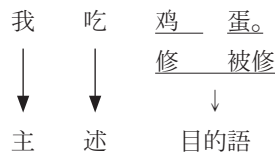
のような文があって、文中の、「私は」と「たまごを」という文の成分を、それぞれ「私」と「は」、「たまご」と「を」に分けてみると、主語と目的語という文節は、共に、二語から組み立てられたものと見ることもできるので、立体的ではないかとも思われる。しかし、「は」と「を」は、ただ文法関係を表すだけで、実質の意味を持たないため、主語と目的語を立体的な成分であるとは見ることはできない。「は」と「を」に相当する中国語の文法関係は語順で表す。例えば、

我吃鸡蛋 (私はたまごを食べる)。

という文の「我」と「鸡蛋」の位置を入れ替えると

鸡蛋吃我 (たまごは私を食べる)。

のようになってしまう。このように、中国語の文における、文節や語の位置関係は、すでに「は」や「を」に当たる文法関係を内包した上での位置関係である。従って、中国語の文の立体性は、意味的な立体性で、日本語のような単なる文法関係の性質のものではない。「我吃鸡蛋」という文を図で示すと次のようになる。



このように中国語は層を成すのに対して、日本語は次のように線條の性質を持つ。

私は たまごを たべる。
主 目的語 述語

日本語の和語や外来語からなる述語以外の文節は、立体的な意味関係を持つものは、非常に少なく、述語という文節も、文法関係しか表さない助動詞が付く程度のもが多く、意味的に層を成すものは中国語よりは少ないと思う。次の例は中国語の目的語が立体的になる場合の例文であるが、たまごが食べたい日本人が

私はにわたりのたまごが食べたい
(我想吃鸡蛋)。

と言うだろうか。

Ⅲ. 中国語の具体性と日本語の抽象性

ここでは、前述の文の「立体性」、「線条性」というものの本質を見て見ることにする。

さて、日本語にも、「私は鶏の卵が食べたい」、「私は鶉の卵が食べたい」というような言い方が無いわけではないが、普通は、「鶏の卵」を日本人は「卵」と言うので、やはり、「私は卵が食べたい」と言う方が一般的ではないかと思う。食べたくない何かの卵が話題になって、君は何が食べたいのかと聞かれた場合などは、他の卵と区別するために「鶏の卵が食べたい」と言うかも知らない。しかし、なんとなく無性に「鶏の卵」が食べたい時、日本人だったら口について出るのは

⑨ 卵が食べたい(な)。

ではなかろうか。ところが、この⑨は、線条的で、しかも主語までも省略されている。これに対して、同じ条件、同じ環境で言う中国語

⑩ 我想吃鸡蛋。

は、主語も省略されず、しかも卵に当る「鸡蛋」は立体的である。このまったく同じ条件、同じ環境で言った⑨と⑩の意味を比較してみよう。

⑨の方は、食べたいもの「卵が」と、食べたい気持ち「食べたいな」という二つの文節しかないのに、⑩の方は、食べたい人「我」と、食べたいもの「鸡蛋」と、述部に当る「想吃」の、三つの文節からなる。しかも⑩の「鸡蛋」は、立体性を持つ文の成分で、日本語の「卵」より意味が具体的で「鶏の卵」となる。したがって、⑩全体の意味は

私は鶏の卵が食べたい。

となる。実は、「卵が食べたい。」と「私は鶏の卵が食べたい。」の二つの文は、表現した内容と気持ちはまったく一致するものである。しかし、二つの文の中、どちらが意味的により具体的であるかということになると、⑩の方に軍配が上がる。これは、つまり、同じ内容、同じ気持ちを表そうとする場合でも、中国語の方は具体的な表現をし、日本語の方は抽象的な表現をするということである。中国語の文と日本語の文のこの様な違いを、筆者は文の「具体性」と「抽象性」の違いと言う。従って、文の立体性と線条性の違いの本質は、文の具体性と抽象性の違いと言う事になる。

さて、中国語の文は立体的で、日本語の文は線条的であることは、Ⅱのところと比較的に詳しく見たが、Ⅱの方で挙げた例文、①、③、⑤、⑦は、みんな立体的な文であったし、これらの文と対応する文、②、④、⑥、⑧は、皆線条的であった。従って、意味的には、①、③、⑤、⑦は、それぞれが対応する文②、④、⑥、⑧より具体的であると見ることが出来る。

なお、先の⑨と⑩の意味的相違点であるが、立体的な構造をなす「鸡蛋」が、⑩の意味を具体化しただけではなく、⑨にない「我」という主語の成分も⑩の具体性に荷担したのと言うまでもない。しかし、中国語にも主語のない文はあるので、主語のある、なしは文の具体性の判断の基準にはなりにくいのではないかと思われがちであるが、主語のない文に主語がつくとそれだけ文の意味がはっきりするのは、疑う余地も無い。

ところで、中国人は日本人より主語を遥かに多く使う。これは、中・日両国の文化の違いの一種であると筆者は見ている問題である。

中国人同士は、お互いに面と向かって話す場合でもよく「你」、「我」という主語を使う。例えば、面と向かって相手に

你去哪儿？
(あなたはどこへ行きますか？)

と言うが、この場合日本人だったら、主語抜き

どちらへ？(今日はどちらへ？)

と言うのが普通であろう。また、学生が先生に向かって

老师，您去哪儿？
(先生，あなたは何処へいらっしゃいますか？)

と、平気で「あなたは」と言っている。それどころか、中国人は自分の父母に向かって、平気で

爸，你吃饭了？
(お父さん，あなたのご飯食べたの？)

と言う。中国人は、日本語の「よくいらっしゃいました」。に当る挨拶も

你来了。(あなた来ましたか)

というふうに「你」と言う主語をつけてしまう。とにかく、中国語には日本語より完璧な文が多い。完璧なだけ具体的であるが、中国人から見たら、日本語は不完壁な文が多すぎる。

以下、日本語のいくつかの不完壁な文(抽象的な文)や語を見てみる。

どうも。

中国語にも日本語の「どうぞ。」に近いものはあるが、この「どうも。」に相当するものはない。この「どうも。」は、中国人から見たら日本語の無限の文を代表する文である。

「どうも。」は、中国語から言えば、一つの語素なので線的で、抽象的である。一つの文が多くを代表すると、その文は抽象的な文になる。語の場合も、一つの語が多くを代表する場合、その語は抽象的なものになる。「犬」は、「白い犬」、「黒い犬」などを代表するので抽象的である。元来「語」や「文」と言うものは、抽象的なものである。しかし、日本語は中国語よりもっと抽象的である。

「鶏の卵」より「卵」の方がもっと抽象的である。したがって、語の方も、日本語の語は中国語の語より抽象的である。語の方は、語素だけの場合は、比較をしてもどちらが抽象的かよく分からないが、中国語の場合は二音節の語、つまり、立体的な語が絶対多数なので、総じて日本語の語より中国語の語の方がより具体的であると、見ることができる。

母ちゃん

この「母ちゃん」は、一つの語であるが、中国語より抽象的である。中国人も、お母さんと呼ぶときは「妈(母ちゃん)」と呼ぶ。しかし、兄弟同士の会話になると、中国語の語の方が日本語の語より具体的になる。中国の子供は、自分の兄弟に、「母ちゃんがこれを先に食べるようになって」と伝言を言う場合など、「我妈叫你先吃这个。」(私の母ちゃんがこれを先に食べるようになって)と言う。中国人は、子供が母の伝言をお父さんに言う場合も「母ちゃん」を「我妈」(私の母ちゃん)と言う。「母ちゃん」と「私の母ちゃん」とでは具体性が違う。一方、日本人の場合は、家庭内部では皆が子供の立場に立って、「お母さん」と言う。お爺さんも、お婆さんも、お父さんも、お兄さんも、お姉さんも皆「お母さん」と言う。従って、日本語の「お母さん」には、中国語の「私のお母さん」、「孩子他妈(子供のお母さん)」などの意味を包含するし、抽象的な名詞となる。

この あ の どの

中国語には、日本語の「その」に相当する連体詞はない。従って、日本語の「こ、そ、あ、ど」は、中国語の「こ、あ、ど」より具体的であると見ることもできる。というのは、「こ、あ、ど」という少数の意味要素に、「こ、そ、あ、ど」という多数の意味要素が含まれるからである。ところが、実際の言語運用においては、日本語は

この車

と言うのに対して、中国語は

这台车(この台の車)

と言う。しかし、日本語には「この台の車」と言う言葉が無いので、「この一台の車」と

意識をしてみると、中国語は、日本語より具体的な表現であるということが分かる。つまり、日本語の「この車」は、中国語の「この一台の車」という具体的な意味と対応する事が分かる。従って、「この本」、「この道」、「このスーツ」、「このパソコン」と言う日本語は、それぞれ、具体的な意味を持つ中国語の「この一冊の本」、「この一本の道」、「この一着のスーツ」、「この一台のパソコン」と対応して、中国語より抽象的であることが分かる。

以上、文単位、語単位における中国語の具体性と、日本語の抽象性を見てきたが、ここで一つ指摘しなければならないのは、日本語の用言は、裸のまま文に参入するが多いが、中国語の用言は裸のままではあまり文に参入せず、多くの場合、動態助詞というようなものなどをつけて文の成分となる。勿論日本語も会話文などでは、「です」、「ます」のような助動詞が付くが、文章体などでは、裸の用言がそのまま文の構成要素となる。従って、日本語においては、文中の他の要素が省略されて、一つの裸の用言だけが、一つの文の働きをすることがある。すると、その一つの用言が抽象性を帯びて実質的には一つの文となる。例えば、日本ではテレビによく料理の試食の画面が出て、試食者が試食の結果を言う時

美味しい!

と一言を言うが、これが外国人から見た場合の抽象的な表現である。もし試食者が中国人だったら、少なくとも「太好吃了。」(大変美味しい)、或は「真好吃」(本当に美味しい)と言うはずである。

さて、中国語には、数多くの意味に分かれていきながら、その語自身は単独ではそれらの意味を持たず、文中の目的語と結合することによってはじめて色々な意味を持つ語がある。その語は、前述の「犬」が「黒い犬」や「白

い犬」などの語を内包する様な抽象性は具有せず、ただ目的語と結合してはじめて、具体的な意味が顕現するものである。つまり、目的語がその用言の意味を作り上げる奇妙な現象である。それを「打」という動詞を例に、見てみることにする。「打」は本来「殴る」、「打つ」という意味であるが、これが後ろに来る目的語によって、色々な意味を表す。例えば、打魚（「魚」と言う目的語が後ろに付くと「打」が「取る」という意味になる）

- 打刀（打＝作る、製造する）
- 打鋪盖卷儿（打＝くる）
- 打毛衣（打＝編む）
- 打蜡（打＝塗る）
- 打旗语（打＝発する）
- 打酒（打＝買う）
- 打草（打＝刈る）
- 打电话（打＝掛ける）
- 打针（打＝注射する）
- 打球（打＝遊ぶ）
- 打胎（打＝おろす）
- 打秋千（打＝のる）
- 打雷（打＝鳴る）
- 打火（打＝おこす）
- 打气（打＝入れる）

これらは、皆動詞「打」の後ろに各種の目的語が付いた文の成分であるが、中国語の習慣に従って前に主語を置けば、みんな立派な文となる。

もともと中国語と日本語は、共に動詞の方が目的語を選択したのである。例えば、日本語と中国語の「殴る」という動詞は共に、「人」、「弟」、「田中さん」のような、「殴られるもの」を目的語として選んだ。従って、「空気」や「雷」のような物は殴られないものだから選ばれなかったのである。ところが、中国語には、不思議にも、一部の目的語が相棒の動詞の語形と発音は元のままにしておいて、意味だけを本来のものとは違うものに変えてしまう現象

が起こったのである。

つまり、一部の「動詞とその目的語からなる文の成分」は、目的語の方が主導権を握って、動詞に既存の動詞の意味とは違う別の意味を持つように、強要したのである。しかし、その目的語は、動詞が元来持っていた意味には干渉をせずに黙認したので、現在も、例えば、中国語の「打」と、日本語の「殴る」のような動詞は、同じ目的語が選べる、動詞本来の意味を持っている。従って、

人を殴る。
打人。

とすることができるが、これが「殴る」、「打」の本来の意味である。

ところが、中国語の「打」は、目的語を付けると力が弱くなって、例えば、

打毛衣

という文節の「打」は、後ろに「毛衣」（セーター）という目的語が付くと、力が弱くなって、「毛衣」の意のままに振り回されて、語形と語音はそのままに保ちながら、本来の「殴る」という意味を、「編む」という意味に変えてしまう。

しかし、日本語の「殴る」は、元の力をそのまま保っていて、「セーター」という語が目的語になるのを、拒絶してしまう。しかし、一部の日本人が無理に

セーターを殴る

というふう、「セーター」を目的語に選ぶと、意地を張って本来の「殴る」という意味を死守しながらしぶしぶ承知して、やせ我慢を張る。

つまり、日本語はどんな語が目的語になっても、「殴る」というような動詞の目的語選

定の権限を奪う事はできず、動詞の元の意味はゆるぎないものにする。それに対して、中国語の「打」は、例文のように、数多くの意味に分かれていく。

中国語のように、一つの動詞が、本来の意味を存続させながら、目的語によって数多くの本来の意味とは違う意味に分かれていく現象を、筆者は“目的語による動詞の意味の具体化現象”と称することになっている。目的語による動詞の意味の具体化現象によって生じた語の意味は、語の元の意味とは、「犬」と「黒い犬」のような「抽象的」と「具体的」といった関係ではなく、ただ語の発音と字形が同じだけで、意味的つながりはないのが普通である。しかし、発音と字形はまったく同じものであっても、意味的には別の語と見られるものが、確実に増えていくのは事実なので、意味的に具体化していくと見ることができるが、これは、中国語特有の語の具体化現象である。

なお、目的語による動詞の意味の具体化現象は、中国語のすべての動詞に見られる現象ではなく、「办」や「搞」など、限られた幾つかの動詞の意味の具体化現象であるが、元の意味が抽象的である動詞ほど、意味が具体化しやすい。これで、中国語は、どんなに意味の具体化が目立つ言語であるかが、分かっていただけだと思う。

IV. 言語現象から見た中・日の文化の相違点

言語は、民族の文化を構成する主要な要素である。従って、中国語は漢民族の文化を構成する主要な要素となり、日本語は日本人の文化を構成する主要な要素となる。地球上の各民族は、自分達の言語で自分達の文化を記載したり、語り合ってから後世に伝える。そして、どの民族も多くの場合、自分達の言語でものを考え、思考してそれを行動に移したりする。

従って、各民族のものの考え方や行動様式には、その民族の言語の特質が滲み出たりする。

また、言語というものはそもそも抽象的な物である。例えば、人間は色々な花を見て、その共通点を理解し、それになかったものを「花」というが、ある具体的な花を指して「この花」と言った場合でも、その花の人の目に映る様相全体を一つ残らず全部表現したかという、そうではない。したがって、「花」と言うだけでは「無限の花」を包含するきわめて抽象的な表現となってしまう。

このように、抽象的な言語であっても、民族によっては、同じ事柄を表現する場合でも、抽象的に表現しようとしたり、より具体的に表現しようとしたりする違いが見られる。

前述の日本語の抽象性と中国語の具体性は、日本語と中国語の特質の考察の結果であるが、この節では、それらの物に言語運用者の心の動きが含まれて、日本の文化、中国の文化（漢民族の文化）となる事を見ている事にする。

1. 日本人は中国人より曖昧な言語表現をする

日本人の言語表現の曖昧さは、世界中の人が知っている事で、日本人も認めている日本の文化である。その典型的な例ともいべきものを見てみよう。中国の若者がよく引き合いに出すのは、

A：どちらへ？

B：ちょっとそこまで。

このような挨拶の事である。何で「何処へ行くのか」と聞いたのに、「そこまで」としか答ええないのかと不思議に思う。「そこまで」とはいったい何処までなんだ？「だから日本人は曖昧なんだ」と言う。確かに中国人の

A：你吃饭了？（君食事済んだの？）

B：吃了。（済んだ。）

という挨拶と比較したら、曖昧な感じがするが、次の挨拶代わりはどうだろう。

A：你上哪儿？

(あなたは何处へ行きますか。)

B：我去学校。

(私は学校へ行きます。)

この中国人の挨拶も、行く場所が「学校」というところで、日本人の言う「ちょっとそこまで」よりは具体的である。しかし、「学校」という場所を決めたから具体的かという、そうでもない。というのは、「学校」という場所はわかって、学校へ行って何をするかはまだ分からないし、「学校」という語も、「花」という語と同じく、抽象的な名詞なので、「我去学校」も、学校がどんな学校かまだ分からないし、意味的には抽象的な要素であると見ることができる。従って、「抽象的」と「具体的」という関係は、あくまで相対的な関係である。

また、日本人はよく人に「がんばって」と言うが、これまた抽象的な言い方で、今はほとんど「じゃーねー」並みに使っているようだが、この「がんばって」は、いったい何をがんばるのか、中国人はさっぱり分からない。中国語で、これに当る語と言えば、「加油」であるが、この「加油」は、比喩であるため、「がんばって」より意味が具体的である。使う場面もサッカーなどの両チームの試合などを見ながら、サポートする掛け声であったりするが、とにかく日本語の「がんばって」よりは具体的である。

さて、日本人はどうして中国人より曖昧な言語表現をするのか。それは、日本人が中国人より相手の事を気遣って、自分の感情を曖昧にするからであると言うことができる。ではどうして、日本人は中国人より相手の事を気遣うのか。それは、日本人も認めていることで、日本人は中国人より他人と一緒にいるという気持ちが強いからである。日本人

は他人と一緒にいるための手段として、相手の事を気遣い、自分の感情を曖昧にして、「ちょっとそこまで」と言語上の曖昧な表現、つまり、抽象的な表現をするのである。このように、言語は人の気持ちを表現する道具で、文化と密接な関係を持っている。文化を人間の行動様式と見た場合、人間の言語表現は、人間の行動様式の一つであるため、人間の言語表現そのものが文化となる。従って、日本人の抽象的な表現は、日本人の文化であり、中国人の具体的な表現は、中国人の文化であると見ることができる。

2. 日本人の言語抽象化の方法と中国人の言語具体化の方法

日本人は、他人とのよい関係を作る（他人と一緒にいる）ために、人の感情を傷付けたがらない。そこで、まず話し相手の事を気遣う。気遣う方法として自分自身の感情を曖昧にするのが普通である。つまり、言語を抽象化する。

日本人の言語の抽象化の方法は一一挙げればきりが無いが、その主なものを中国語の具体化現象と対照しながら、いくつか見てみることにする。

- i 「～する」(動詞文)文を「～です」(名詞文)文、或は「～だ」文にする方法。

日本人は、「～する」文、つまり、「ウナギを買う」、「ウナギを食べる」、「ウナギを取る」のような動詞文を、必要によっては「私はウナギです」、「今日はウナギだ」のような文、つまり「～です」、「～だ」などの名詞文にしてしまう。これは「だ」、「です」の形をした助動詞のない言語には、ありえない現象なので、世界広しと言っても、日本語にしかない現象である。もともと「～する」が意志動詞の場合は、「君とは一緒に行かない」、「私は彼女といく」のように、主観的な意志が丸出しになって、相手を傷付けやすい表現である。

従って、相手の事を気遣う日本人は、少しでも語気を和らげて、人の感情を傷付けないようにするその心遣いに、ぴったりの表現が、この「～です」、「～だ」という表現なわけである。「黒板です」、「椅子です」、「ウナギです」のようなものには話者の主観的な意思が含まれにくいので、人の感情を気遣う日本人には、この上ない好都合の表現である。

人間の言語の表現活動様式も、人間の行動様式の一つなので、「～する」の表現を、「～です」の表現にするということは、一種の文化である。つまり、「～する」という言葉遣いを、心遣いによって「～です」の様式にすると言う事は、一種の文化であると言う事である。

ところで、「私はウナギを食べる」、「私はウナギを買う」、「私はウナギを取る」等は、ひっくり返して、「私はウナギです」と言うことができる。もし、食堂という環境で、リーダー役の人に「君は何にする」と聞かれた場合の答えとして、「私はウナギです」と言うことができる。「私はウナギを買う」も、「僕は鯛を買う」と言った人に、「君は？」と言われた場合の答えとして、「私はウナギです」と答える事ができる。「私はウナギを取る」も、「僕は海の魚を取る」が、「君は？」と言われた場合は、「私はウナギです」と言うことができる。従って、「～です」の文は、多くの「～する」の文を包含することができる。つまり、「～です」の文と「～する」の文の関係は、「犬」と「黒い犬」のような関係になって、「～です」の文は、抽象的な文である事が容易に分かる。

このように見てくると、日本人の心遣いによって出来上がった「～です」という文は、いわゆる曖昧な文、つまり、抽象的な文であったことが分かるし、日本人は、「～する」という文を、「～です」という文にする巧妙な方法で、文を抽象化することが分っていたのだと思う。

一方、中国語には、日本語の「です」や「ます」

のような助動詞も無く、日本語と違って文の述語役をする動詞や形容詞が「活用」というような語の変形もしない。そのためか、中国人は言語を具体化するのが得意である。その具体化の方法は前述の語の立体化、文の立体化が、基本的な方法と言える。その他は、日本語より文の成分を省略しない、語を重複する等が挙げられるが、例えば、中国語も文脈などから見て、明白な主語は省略するのが普通であるが、それでも日本語ほど省略する事はない。前述したように、中国人は他人と向かい合って対談をする場合でも、「我」、「我」と、しきりに「私」という主語を表現する。人称代名詞の数は、日本語の方が中国語より遥かに多いが、使用頻度は、中国語の方が日本語より遥かに高い。それに加えて中国語の方は、動詞述語もあまり省略しない方である。前で述べた、「～する」を「～です」の表現に変えてしまうと、「述語の動詞を減らす」現象も中国語にはない。このように、中国語の動詞文においては、主語と、述語の動詞は、文成立の必須条件となるぐらい、無くてはならないものであるが、動詞の方が意志動詞の場合、「我要买这个。」(私はこれを買う。),「我无论如何也要去。」(私は何が何でもいく。)のような文を見ても分かるように、自己主張の文が多くなる。このように中国語には、他人を気遣う特別な表現形式がなく、文を省略して他人を過度に刺激しないぐらいの方法しかないと言っても過言ではないと思う。言葉遣いは心遣いであると言う観点から中国人を見た場合、中国人は、確かに自己主張の傾向が強く、他人をあまり気遣わない。従って、中国人は、自己主張の文化を持っていると言われても仕方が無いと思う。

- ii 「一生懸命に勉強する。」を「勉強するぞ。」というふうに、一つの文の一部の要素を省略して抽象化する方法

この方法も文を抽象化する方法であり、他

人を気遣う方法でもある。しかし、この方法は百パーセント他人思いの方法とはいえない面もある。というのは、場合によっては、この方法で、話し手の意志や決意などを表現し、他人の様子などを見て話し手が感動をしたことを表現することもできるからである。話し手の意志などを表現する場合は、用言に決意したことを自分に言い聞かせる意を表す終助詞「ぞ」や、感動を表す終助詞「ね」などを付けて表現するのが一般的である。しかし、この方法は、前掲の

どうも。

のような文も入るので、日本人は、他人を思いやるために色々な方法を取るが、その中心をなすのは、曖昧さ、つまり、抽象化であるということが本当に分かっていただけかと思う。

さて、スカートを試着しているお客さんに

⑪ 你穿裙子不好看（あなたはスカートを穿くと醜い。）

と言うより、

⑫ これはちょっと…

とか、「このスカートはちょっと…」と言った方が、心遣いがお客さんに伝わる事は言うまでもない。

これは、ものを具体的に言うより、抽象的に（曖昧に）言った方が、人に心遣いが伝わるという例であるが、このように、文を省略する方法で抽象化を図る方法は、どの国の言葉にも見られる現象である。従って、中国人も

这条裙子有点儿…

（このスカートはちょっと…）

と言って心遣いをお客さんに伝えるぐらいは出来るし、現に中国人の中でもこのような言葉遣いをする人もいる。従って、iiの方法は、中・日の共通の方法であると見る事ができる。

しかし、「言行一致」を尊ぶ中国人と建前と本音を分ける日本人とは行動的にも違いがある。その違いの具体的な例は他でない⑪と⑫を言い表す行動である。「言行一致」を信奉する中国人は、お客さんに⑪と言ってしまっても、少しも後ろめたさを感じないし、むしろ本当のことを言ったと誇りに思うかも知らない。しかし、絶対多数の日本人は、⑪を言う勇氣は無いと思う。というのは、日本人は他人に対する心遣いが中国人と違い、また、このような場合は、本音を使わずに建前でいくと言う文化を持っているからである。

建前と本音の使い分けも、程度の差こそあれ、どの民族にもあることであると筆者は思っている。というのは、人間の共通性から見ても、敵同士か、非常に親しい間柄で無い限り、面と向かって、他人に「あなたは醜いです」とは言わないのが常識であるからである。

それでは、どうして中国人は常識はずれの⑪を平気で言っていたのであろうか。その原因は、中国人が強い自己主張の文化を持っており、言行一致を尊び、建前と本音を日本人ほど身に付いた分け方はしていないところにあると思う。

以上見てきたように、中国人は、日本人と同じく、文を省略して抽象化する場合でも、日本人ほど徹底した抽象化はしない事が分かった。

実は、用言述語文を省略する場合、日本語の場合は、例えば、「この料理はとても美味しい。」という文を「美味しい。」という一つの形容詞になるまで省略することができる。しかし、中国語の場合は、「这盘菜真好吃。」が、質問の答えでない限り、「真好吃」となっ

て、「好吃」より、膨らんだ成分になってしまうのが普通である。つまり、中国語は、日本語ほどの抽象化はしないのが普通である。

3 ここでは、日本人は人の感情を傷つけないため、或は、人とのよい関係を作り上げるために、中国語にはない言語表現様式を使う事を、見てみることにする。

i 日本人は、「～する」という形の文を、「～させていただく」という形の文に変える方法によって、人とのよい関係を築こうとするが、このような言語表現様式は、中国語にはないものである。

「～する」という表現を、「～させていただく」という表現にする方法は、他人を気遣い、他人を思いやる方法ではあるが、言葉を抽象化する方法ではない。

⑬ 今日はちょっと早めに帰らせていただきます。(～させていただく)

これは、他人よりちょっと早めに帰る人が同僚に言った表現であるが、文意は

⑭ 今日はちょっと早めに帰る。(～する)

である。日本人はなぜ⑭を、⑬のように表現するのか。一言で言えば、同僚に嫌われるのを怖がるからである。同僚とは何の関係も無い行動をするのに、「同僚が承諾してくれたので帰る」というニュアンスを込めた⑬を言うのを見たら、同僚に嫌われるのを怖がるからだとしか言い方が無い。

自分の自由意志に従って行う自分の動作を、「他人が承諾してくれたおかげでそうすることができる」と思う民族は、日本民族だけだと思うが、たとえ心の中ではそうは思わなくても、そのような意味合いが含まれている表現、つまり、⑬のような表現を長く続けて

言うようになると、話し手の心も本当にそうなってくると筆者は思っている。というのは、言葉遣いは心遣いであるからである。

自分の行動を他人のおかげだと思う民族は、他人と一つになりやすいと筆者は思う。事実、日本の文化は、一つになりやすい文化である。

日本人の多くの言語表現様式は、他人を気遣い、他人と一つになろうとするものである。前述の抽象化も、結局は他人を思いやるものである。日本語を使う日本人全体が、お互いに、これほど他人を思いやるのに、一つになれない事がありうるだろうか。だから、「日本の文化は一つになりやすい文化である」と筆者は主張する。

ii 日本語には中国語より完璧な敬語の体系がある。敬語も人との関係を良くする働きをするが、ここで一つ指摘したいのは、日本語の敬語は、他の言語の敬語と違って、内(うち)対外の敬語である事である。日本人は、「うちの会社～」、「うちの～」とよく言うが、これに当る中国語はある。

しかし、「それはうちの社長が申した事です。」のように、外に対して、うちの社長のことを謙った言い方をして、そとの者を敬うようなことはしない。このように、日本人は、うちと外の関係においても、個人対個人の場合と同じく、外に気を使い、外とよい関係を保つための表現をする。これに対して、中国人は、外に対してうちの最高責任者のことまでを、謙るようなことはしない。

敬語の体系が、ほとんど日本語の敬語の体系に近いという韓国語を使う韓国人も、内対外という関係の場合は、

우리사장님이 이렇게 말씀

하셨습니다.

(うちの社長様が、このようにおっしゃいました。)

のように、外の者の前で、内の社長を思いっきり敬ってしまう。もっとも、韓国人は、個人対個人の場合でも、話し相手に

우리아버님이 이렇게 말씀
하셨습니다.
(私のお父様が、このようにおっしゃいました。)

と、平気で言ってしまう。つまり、韓国人も、外の者や他人に対しては、日本人ほどの、気遣いはしないと言う事である。

実は、韓国語も中国語に近い具体的な言語である。例えば、日本語は

今学期は一生懸命勉強するぞ。

という表現を、ただの

勉強するぞ。

というところまで抽象化できるが、韓国語は、

이번학기엔 열심히 공부하겠다
(今学期は一生懸命勉強するぞ)

を、

공부하겠다 (勉強するぞ)。

というところまでは抽象化できず、どうしても

열심히 공부하겠다
(一生懸命勉強するぞ)

と言わなければならない。というのは韓国語の、「공부하겠다」は、中国語の「我学习」と同じく、他のことをする、例えば「商売をする」ということに対しての「勉強する」であって、日本語のような「しっかり勉強す

る」、「一生懸命勉強する」などを抽象化した「勉強するぞ」ではないからである。

とにかく、韓国人は、具体的な言語表現が好きで、日本語の抽象語

どうぞ どうも。

に、当るような語も作らない。

日本語と中国語と韓国語は、同じ北東アジアの言語であり、国家、生活、文化、活動、宇宙…等のような無限と言ってもいいぐらいの共通の語を持ちながら、上述のように中国語と韓国語は、具体的な語で、具体的な言語表現をするのが特徴的であるのに、日本語だけは、語レベルにおいても抽象的であり、文レベルにおいても抽象的な言語表現様式を示すのが特徴的である。

以上で分かる事は、中国人（漢民族）は、具体的な言語を用いて、主語と述語などの文の成分もあまり省略せずに、主体の気持ちや考えなどを具体的に表現し、日本人は、抽象的な言語を用いて、主体の気持ちや考えなどを前述の数々の抽象的な表現様式に当てはめて、抽象的に表現することである。

さて、以上の中国人の言語表現様式と、日本人の言語表現様式は、それぞれ社会性を持つ（民族性を持つ）行動様式であるので、文化そのものである。従って、中国人が具体的な言語を用いて、具体的に言語表現をするのは、中国の文化であり、日本人が抽象的な言語を用いて、抽象的に言語表現をするのは日本の文化であるといえることができる。

V. おわりに

本論文では、中国語と日本語の語構成から文構成までの構造的相違点を考察し、それらの相違点の、意味の本質は、何であるかを探究した。その結果、中国語は、具体的という特性を備えており、日本語は、抽象的という

特性を備えている事が分かった。また、本論文では、中国人（漢民族）は、言語運用において、主体の気持ちや考え方（社会性を持つもの）を、どのような形、どのような言語表現様式で表現し、日本人は、社会性を帯びる、気持ちや考え、心遣いなどを、どのような言語表現様式で表現するかを考察した。

更に、民族の文化は、社会性を持つ民族の価値観、心の動き等を反映した行動様式であることに着目して、中国人（漢民族）と日本人の言語表現様式を実証的に分析して、中国人（漢民族）は、具体的な言語表現をする文化を持っており、日本人は、抽象的な言語表現をする文化を持っているという事を立証した。

また、言語表現様式の種類や、言語表現様式に込められる心遣い、人間の意識などの種類によって、

中国の文化は、

具体的な言語表現をする文化、
強く自己主張をする文化であること、

日本の文化は、

抽象的な言語表現をする文化、
うちと外を分ける文化、
人を思いやる文化、
人と一つになりやすい文化（人と仲良く
なりやすい文化）、

等の文化であることを考察した。

勿論、中国人の中には、自分たちが具体的な言語表現をしていることを知らない者が多く、日本人も、自分たちが抽象的な言語表現をしていることを自覚している者は少ないと思う。というのは、文化というものは、異文化と比較をしてみないと往々にして気が付かないからである。

なお、これは蛇足であるが、日本人が曖昧な言語表現、つまり、抽象的な言語表現をするのは、日本人の文化であると言ったが、だからと言って、日本人は具体的な言語表現ができないかという、そうではないと、こ

こに強調しておきたい。例えば、「(よーし)勉強するぞ」の具体的な表現は「今学期は一生懸命勉強するぞ！」である。従って、日本人自身は、日本語が曖昧な言語であるとは思わないのが普通であると思う。

【引用文献】

- 1) 崔 春基「言語から見た中国の文化と日本の文化の相違点」社会福祉学部北星論集36号(1999) 1-14
- 2) 崔 春基「言語から見た中国の文化と日本の文化」社会福祉学部北星論集37号(2000) 1-16
- 3) 崔 春基「中国の文化と日本の文化」社会福祉学部北星論集38号(2001) 57-75
- 4) 崔 春基「中国の文化と日本の文化 その2」経済学部北星論集42号(2002) 73-87
- 5) 中国社会科学院语言研究所词典编辑室編「現代汉语词典」1987 商务印书馆
- 6) 愛知大学中日大辞典編纂所編「中日大辞典」増訂版 1986 大修館書店
- 7) 房 玉清「实用汉语语法」1992 北京语言学院出版社

[Abstract]

Comparison between Chinese and Japanese Cultures:
Focusing on Contrast between
Chinese and Japanese Language Expressions

Syunki SAI

In the main thesis, the structural differences between Chinese language and Japanese language writing organization and the term "organization" are discussed. Now we would like to discuss the differences in the meaning of the expressions.

The result sare as follows: Chinese language is more detailed- oriented While Japanese language is more abstract- oriented. Also, we have found that Chinese mainly compose their feelings and thinking into how they express themselves. For Japanese, they carry sociality with them and consider how they express their thinking, feelings, and their considerations. Further, we were able to observe that in people with sociality, their values and changes in their feelings reflect their behavioral patterns so that we are able to positively analyze the differences in how we express ourselves. The Chinese are a detailed-oriented culture and the Japanese are an abstract - oriented culture.

Key Words: detailed-oriented, abstract-oriented, culture